

須恵町と明治六年筑前竹槍一揆

今年五月、『筑前竹槍一揆研究ノート』を出版しました(花乱社)。筑前竹槍一揆をテーマとする本としては、私にとっては三冊目となります。

筑前竹槍一揆は明治六年(一八七三)六月に起きた一揆で、筑前一五郡のすべてが参加しました。すなわち、東から嘉麻郡、穂波郡(後に合わせて嘉穂郡)、遠賀郡、鞍手郡、宗像郡、糟屋郡、南から上座郡、下座郡(後に合わせて朝倉郡)、夜須郡、御笠郡、那珂郡、席田郡、西から怡土郡、志摩郡(後に糸島郡)、

早良郡、それに城下町福岡と博多です。福岡は早良郡と那珂郡にまたがり、博多は那珂郡に属しますが、行政区域としては郡とは別個に扱われていました。筑前は旧福岡藩領と秋月藩領にほぼ相当します。

当時この地域の人口は約四五万人、その内の一〇万人が参加したと言われる大一揆です。法務省に残る取調記録には六万四千人の名が記されています。実際の参加者はこれより多いと考えられていて、研究上は一〇万人が妥当な数字であろうと見

られています。最小限六万四千人が参加したと見積もっても、明治初年の最大級の一揆であることは間違いないありません。

しかし、現在この一揆について知っている人はまれでしょう。昭和五十八年(一九八三)に町制施行三〇周年を記念して出版された『須恵町誌』では全く触れていません(この時代の執筆を担当した私の無知によります)。町誌の刊行は今から二九年前のことですが、筑前竹槍一揆について私はその存在すら知らず、

まして須恵町との関係など考えることもなかったのです。この一揆では文字通り参加者は竹槍を一本ずつ持参していました。その行進の模様を目の当たりにしたある老人は「秋の野のススキ(薄)のようだ」と表現しました。

当時県庁は福岡城内の舞鶴中学校の位置にありました。一揆は大手門を乗り越えて城内に乱入し、県の官舎に火を付け、県庁の建物を破壊して、書類を燃やしました。福岡には軍隊は駐屯していなかったため、臨時に旧士族を集めて鎮圧に当たりましたが、ほとんど無政府状態に陥ったのです。多々良川では大蔵省の役人二名と従僕の少年一名が殺さ

れました。

一揆は太陽暦の施行、徴兵令の実施、廃藩置県、神仏分離(神社と寺院を分離)など、政府の進める文明開化政策に反対していました。当時このような一揆は西日本の各地で頻発しました。筑前竹槍一揆の鎮圧に政府は陸軍、海軍を派遣しました。

当時の記録には現在の須恵町付近の事情が次のように書かれています。

― 亀山八幡宮の麓に集まった一揆勢はべふ別府、さかど酒殿、植木、志免、両須恵(須恵と上須恵)より二手に分かれ、一手は吉原、田富へ、もう一手は宇美に乱入して同村の富豪小林家を襲って家具と家財を壊し、酒桶の栓を抜いたので清酒は田んぼに流れ出た。

一揆の経路に当たる村役人、豪商、豪農はいずれも被害を免れませんでした。

一揆終了後、政府は一揆参加者を処罰しました。最も軽いのは「党民ニ誘ハレ随行致スとが科」でむち咎三〇(咎で三〇回尻をたたく)の刑です。全体ではこれが五万二千余に上ります。実施不可能なので実際は二円二五銭払えば刑を免除されました。一円は江戸時代の一両ですから大金でした。

須恵町域には当時七つの村がありました。それぞれで「党民随行」とされたのは、新村二五人、佐谷村一二六人、上須恵村一〇一人、旅石村四四人、植木村七九人、須恵村一〇四人、本合村四二人、合計五二一人です。この人たちは一揆が村に来てむりやり動員されたが、積極的な破壊活動には加わらなかったと認められた人たちです。私の母方の曾祖父は若杉村(篠栗町大字若杉)に住んでいましたが、やはり一揆に参加して付和随行に問われてい

ます。この一揆では、参加しているか、襲われているか、鎮圧に向かったか、いずれにせよ誰も無関係ではありませんでした。

一三九年前の出来事ですが、一揆に襲われて玄関や、上がりかまち、床柱、かもいに刀傷、なた傷を残している家はまだ残されています。明治の変革は民衆の抵抗を排除しながら進められ、現在の近代社会が実現していったのです。



「筑前竹槍一揆研究ノート」
▶問合せ先 花乱社 092-781-7550



一揆の際の柱傷(飯塚市勢田松喜醤油屋へこのみ許斐家)
史跡として公開されています。
問合せは飯塚市歴史資料館へ。